

さらなるリアリティを求めて

山本理顕(工学院大学教授, 建築家)

藤森照信(東京大学教授)

千葉学(東京大学大学院助教授, 建築家)



住宅をつくる側は誰に対して供給するのか マーケットを知ることがはもはや不可欠

編集 昨年開催した第1回では、21世紀における新しい都市居住のあり方をテーマに「21世紀住宅」という課題となりました(テーマ座談会:『新建築住宅特集』0505, 結果発表:同0511)。第2回となる今年も、審査委員の皆さんによるテーマ座談会として課題を決定していただきます。まず、多くの応募があった第1回を振り返りながら、今回のテーマを何に据えるか考えていただきたいと思います。

山本 前回で印象深く感じたのは、生活と空間について考える順序が変わってきたということです。最初に生活があり、その生活空間をどのように実現するかという順序立てがあるとしたら、たとえば松繁案(第1回優秀賞)は、そういうことを一切考えていないひとつのパターンが先にある、そのパターンがどのような生活に適するのかを考える、「住宅なんてせいぜいそういうものだよ」という割り切った考えですね。

千葉 その考えはひとつの象徴だと思います。僕たちは、あるヴォリュームの空間をたまたま住宅として使っているだけで、現実には生活行為やライフスタイルに対して空間が1対1には対応していない、機能主義的な組み立て方はせず、どんな空間でも基本的な生活は成り立つという考え方が前提になってきているのでしょうか。

藤森 このコンペの可能性はさらに広がると思う。独居者の社会性をとらえた駐車場独居計画案(第1回佳作:布目案)がありましたよね。社会のマーケットを考えて、しっかりと成立する方法まで踏み込んでいたらもっとよかったと思う。彼のような考えをもっている人が世間にはきっとたくさんいるはずで。

山本 昨年のテーマ会議でも言いましたが、住宅をめぐるマーケットが今どうなっているのかという話は、今回のコンペでも欠かせない気がします。住宅を取り巻く状況として、それぞれに「マーケティング」が必要になっている。誰に対して供給しているのかを含めて住宅を考えなければいけない。戸建て住宅のように、施主と建築家だけが話し合っただけのプライベートな住宅ができればいいかというところ

は違う。応募者にはそのことについてもっと考えてもらいたいと思います。

藤森 「マーケティング」と聞くと、マスを対象としたものをイメージしてしまいがちだけど、何もそうでなくてもいい。10人ほど集まったものであれば成立する。西沢立衛さんの「森山邸」(『新建築』0502)を見て、あの住人同士は「裸族」じゃないか(笑)、という話をしていただけど、世の中にはいろいろな「族」があって、その数だけ集まり方もあると思う。大胆な案でも、予算さえあればきちんとしたものをつくらうとする人もいますから、現実性もある。

千葉 そう考えると、集まり方の新しい提案ができるはずですね。駐車場に孤独に住むことを望む人もいれば、コーポラティブで住まいをつくらうとする人もいる。個人で住む人がいる一方、何らかのゆるやかなつながりをもちながら住む人がいる状況を見ていると、家族と一緒に住むことと何人かで住むことの境目も曖昧になってきている気がします。

山本 「マーケティング」は、藤森さんがおっしゃったように小さい集合の中から考えていくことでもあると思います。だから「21世紀住宅」というテーマは、その小さな集合について考えることでもあるわけですね。これからの集合の可能性を考えるうえで、第2回でも共通テーマとして続けていいのではと思います。

都市のポテンシャルを探りながら 実現性のある提案へのステップとする

千葉 外の世界とどうつながるかということも、今一度考えてほしいと思います。それは都市空間だったり制度だったりしますが、住宅内部の問題だけでなく、外との関係を見直すと、まだ新しいアイデアは出てくるでしょう。これまでとは違う外とのつながり方がリアリティをもって提案できるとおもしろいですね。

山本 住宅は閉じることによって、内部の充実を図ってきましたよね。それは、完結したパッケージ商品として民間ディベロッパーが開発してきたからです。マンションの1ユニットを世帯単位で完

全に閉じた商品として開発してきた。「nLDK」という記号と、駅から何分、それだけで商品になる。

一方、商品の外側の部分はパッケージされない。そこは商品になっていかない。今のままでとますます外とつながることができない。そう考えると、いかにその住宅が外側とつながることができるか、それを改めて聞きたいと思います。できるだけ具体的にそれを問うとしたら、今回のコンペを実施コンペにできないかなと思います。実際につくることができれば、そこから新しい展開が生まれてきますよね。

主催 実施コンペにした場合、実現化するというハードルが自由な発想を制限してしまうのではないのでしょうか。

千葉 逆にやる気が出ると思いますよ。学生は実施コンペでも応募してきますから。

主催 現時点では敷地の提供は難しいのですが、アイデアが現実的に適していれば私たちと一緒につくるといことも考えられます。

山本 実際につくる場合、提案者それぞれが自分の案に「実現性」という意味を盛り込んでほしいと思います。戸建て住宅でも集合住宅でもいい。複数戸をセットにするといろいろなタイプが考えられます。何らかのかたちで「21世紀住宅」は実現を目指していくのがいいかなと思います。実現できたらおもしろいですね。

審査委員長：

山本理顕 (工学院大学教授、建築家)

やまもと・りけん / 1945年北京生まれ / 1968年日本大学理工学部建築学科卒業 / 1971年東京芸術大学大学院美術研究科建築専攻修了後、東京大学生産技術研究所(原研究室) / 1973年山本理顕設計工場設立 / 2002年~工学院大学教授



千葉 前回選ばれた案を「実現性」という視点で振り返ると、どれも種のプロトタイプになり得るものです。都市で使われていないビルの屋上スペースを使った亀井案(第1回佳作)のように、都市のある側面に着目してポテンシャルを引っ張り出していく考えが見えました。

現実の社会に対して展開可能な考えは、今回も全面に出していただきたいですね。

藤森 今回、屋上スペースを使う案でいいものがあつたら、ダイワハウスさんの会社の屋上につくってみますか(笑)。

千葉 建築のアイデアが現実はどう展開できるのかを見せてくれば、実現化を目指すステップとなりますね。

新しいモデルを提示する 現在はその好機

主催 「リアリティ」や「実現性」を考えると、これからは住宅の社会的価値を見定め、良質な住宅を社会にストックしていくことも求められてきます。社会財として住宅をとらえ、住まいのあり方を提案してもらうことも考えられると思います。

山本 それには、将来訪れる都市の風景をイメージする必要があります。高齡化が進み、人口の1/4が65歳以上になったとき、都市の風景がガラリと変わる。ハウスメーカーやディベロッパーは、そのとき都市がどうなるかというイメージをもってつくっていくといけません。

主催 たしかに、同じような年取や世帯構成の人たちが同時に歳をとっていく環境があります。ニュータウンのいくつかはオールドタウン化しつつある。イメージをもって、時間的な経過という視点を取り入れた提案を考えることが大事ですね。

また、一般的な住宅の主流はnLDKタイプですが、人間は歳を重ねると生活パターンが変わります。年齢により生活が異なることに対応できる住宅を、どこまで商品として開発できるかも重要なテーマです。

山本 パッケージ商品にしないことが重要ですね。購買層が決まってしまうから。

高齡化社会を前提にするとしたら、もし、家の中だけで閉じていたら、そこではもはや生活できない。そうならないためにも、住宅は外に開いていくしかない。今までの住宅のつくり方では、外に開くと商品になりにくいわけです。改めて「外」とは何かということを考えなければいけない。

千葉 住宅の社会的価値や商品開発まで見据えるならば、土地の問題も含めてモデル化してもらうことは必要だと思います。ただ、プロダクトとしてだけ考えてモデル化するのはやめてもらいたいですね。展開する可能性はあまり感じられませんから。

山本 開発する地域と一緒に商品開発をしていかなければ、もはや住宅のマーケットは広がらない。でも、マーケットを広げていく可能性はそこにある気がします。これをきっかけにそのモデルを出してもらうのはいいですね。ル・コルビュジェの「ユニテ・ダビタシオン」(1952年)のように、その後のモデルとなるようにつくった建築には強さや可能性がある。今回はテーマを自分で設定してモデルをつくってもらい、それが実現可能であればその先の可能性も考えるというのはどうでしょう。

藤森 そこまでリアリティをもたせるならば、はっきりした敷地条件を決めたいね。戦後の住宅政策がはっきりと機能しなくなっている今だからこそ、それとは違う新しいことを考えている人たちがもっと出てくると思う。とんでもないアイデアが出る可能性があるかもしれないよ。

藤森照信 (東京大学教授)

ふじもり・てるのぶ / 1946年長野県生まれ / 1971年東北大学工学部建築学科卒業 / 1978年東京大学大学院修了 / 現在、東京大学教授



山本 そういう意味では、今はもう一度住宅を考えるチャンスだと思う。藤森さんがおっしゃったように戦後の住宅政策が終わり、これからどうすればいいか悩んでいる。そういう状況に、建築は新

しいモデルを提示していけるか。このコンペでそこがうまくできたらおもしろい。

主催 土地の問題では実際、売りにくい場所にどうやって魅力をもたせるかという課題も抱えています。マーケットやパッケージ、モデルといったことをリアルに突き詰めた結果、課題を克服するような発想が出てきたらと思います。

千葉 たしかに都市部だけで考えなくてもいいと思います。郊外と都市の問題はセットですから。その場合はライフスタイルもセットにしてイメージをつくらないといけません。

藤森 典型的な分譲地であってもそれなりにおもしろいはずですよ。あなたならどうしますかと応募者に問うやり方はあるね。

千葉 分譲する土地の割り方を無視してもいいかもしれませんね。実際には、相続やディベロッパーにより細分化された土地をどう再構築するかという問題があるので、それについて新しく提案するのはおもしろいですね。

大規模開発が行われる一方、引き算型に空き家が出てゴーストタウン化しつつある郊外地がある。木造の密集地も同じです。そういう状況を踏まえると、やはり土地の問題は建築を考えるうえで大きいと思います。それをセットにしないと、もはや解決できない状況にきている。

藤森 駅から遠い敷地の場合、マーケットを反映した設定をしなければいけない。そうやって、前回と同じテーマでありながら具体的な敷地における若い人の想像力や思考の展開を見てみたいですね。

土地から触発される社会的シナリオが 21世紀住宅を組み立てる

山本 では、今回の条件を整理しましょう。テーマは前回と同じ「21世紀住宅」。そして、さらなるリアリティを期待して、敷地条件をはっきりさせる。敷地面積、建蔽率、容積率、高さといった項目を踏まえて、土地のイメージをわれわれが提示して、ダイワハウスさんに設定してもらいましょう。

藤森 敷地面積は前回同様、300～400m²くらいがいいでしょうね。複数戸も可能であるといい。

千葉 所有の概念について今回もまた考えてもらいたいですね。誰が実際に所有しているのか。また、ある一時期使う感覚と所有する感覚は違いますから。そういうリアルな設定はいいですよ。

山本 ディベロッパーとして建てるならば賃貸でもいいわけですから、そうすると賃貸と分譲では建築のつくり方も変わってくる。民間の開発に応じられるような建築を提案してもらうか、どこまでリアリティを求めるか。

藤森 学生に賃貸と分譲という分け方ができるかな……。分譲に対するリアリティがないし、民間という設定にも学生はリアリティを感じないと思うよ。敷地条件を提示する程度に留めて、それに合わせてどうするか考えてもらえばいいと思う。

千葉 賃貸と分譲、どちらでもいいとしましょう。そうすれば敷

地の割り方も含めて、複数戸を建てるミニ開発的なものも提案としては考えられる。おもしろいものが出てきそうですね。

山本 そうだね。提案する人に委ねましょう。

千葉 応募者にはそうやって自分の提案が成立する社会的なシナリオを組み立てて記述してもらおうのほうがいいと思います。

それと、前回の応募案の多くが藤森さんのいうところの「分離派」で、解体したものが多かったから、それがもう一度どのように集まるのかを考えてほしい。前回と同じでは困りますから、それを超えるアイデアが出てくるといいですね。

千葉学 (東京大学大学院助教授、建築家)

ちば・まなぶ / 1960年東京都生まれ / 1985年東京大学建築学科卒業 / 1987年同大学院専攻修士課程修了 / 1987～93年日本設計 / 1993～96年東京大学建築学科キャンパス計画室助手 / 1998年～同大学院建築学専攻助手 / 2001年千葉学建築計画事務所設立 / 現在、東京大学大学院建築学専攻助教授



山本 複数世帯や複数人が一緒に住むような、ある種のやわらかさをもった「21世紀の集合」とでもいいますか、共同している、集合しているというニュアンスが感じられるものを考えてもらいたいですね。「世帯」という単位を表す言葉も、何か他のいい方を見つけてくれたらと思います。

藤森 たしか、前回の課題文には「社会的リアリティや地域社会への貢献を考えてもらいたい」としましたが、応募者はそれについては深く考えずに、その土地や周囲の環境がもつ条件を盛り込んでいなかったよね(笑)。

今回は、土地から触発される設計主旨を記述してもらうわけだから、住むということについて自分の中でリアリティをもってもらいたい。リアリティをもたせれば、設計したものは説得力もグッと増しますから。このコンペをきっかけにそうしてもらえるといいよね。

編集 今回のタイトルはどうしましょう。

藤森 やはり「21世紀住宅」というだけでいいんじゃないかな。審査する側がこれだけテーマ設定に悩んでいるよと公開しているし、より自由度は高いほうがいいでしょう。

ハードルは高くなったけど、応募者にはやってみようという気持ちで向かってきてもらいたい。だから、第2回のタイトルをつけるとするなら「21世紀住宅 II」でいいんじゃないかな。第1回からのステップアップの意味も込められる。応募者のイメージが固まらないように、サブタイトルも特につけないでいいでしょう。

山本 そうですね。前回応募した人も、はじめての人も、何となくわかったと思うから、さまざまな発想で考えてもらいたいですね。では、第2回のタイトルは「21世紀住宅 II」としましょう。

主催 同じテーマでも新たに具体的な条件が加わりましたので、前回を超えるアイデアを寄せていただけることでしょ。そして、今回の2次審査は公開審査として行うことが決定しています。刺激的なやり取りが繰り返されることを期待しています。

(2006年1月30日、新建築社にて。文責／編集部)